

ポローニア

p a u l o w n i a

筑波大学附属学校教育局
広報誌 ポローニア

令和5年5月31日 発行
通巻第57号

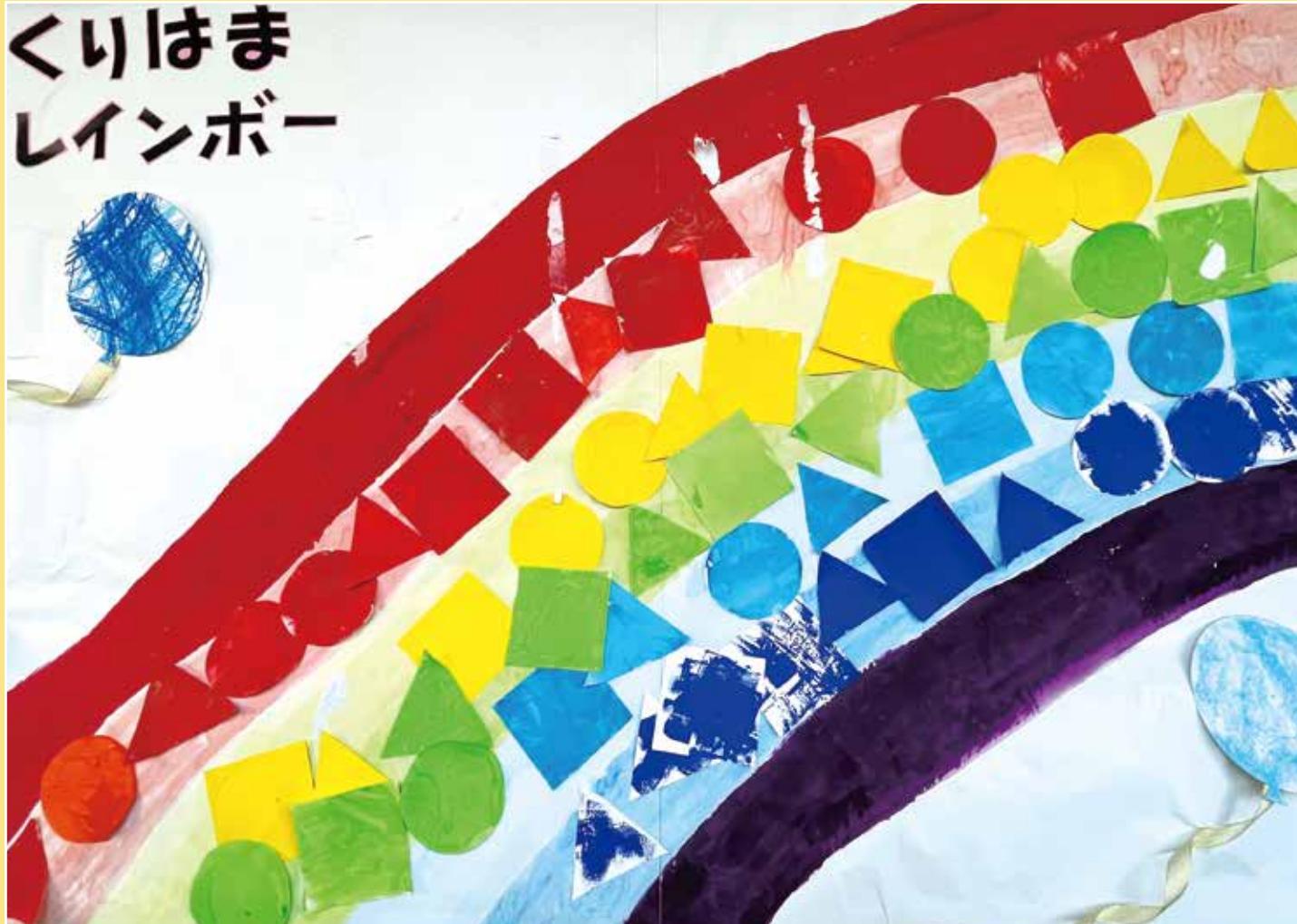
57

【巻頭言】 附属学校教育局 教育長 吞海沙織 「非連続の時代における学校教育に向けて」

- 2 ●令和4年度 附属学校研究発表会が開催されました ———雷坂浩之
- 3 ●小学部高学年スポーツ体験授業 ———佐藤寛哉
- 3 ●探究とデザイン —駒場美術科の実践— ———川人 武
- 4 ●コミュニティバスの乗車体験とマナー学習 ———田上幸太
- 4 ●筑波大学附属小学校創立150周年 ———笠 雷太
- 5 ●総合的な探究の時間「筑波スタディ」の取り組み ———山田研也
- 5 ●第51回 肢体不自由教育実践研究協議会 ———田村裕子
- 5 ●SEA-Teacher プロジェクトの受け入れ ———建元喜寿
- 6 ●令和4年度 理療科教員養成施設
施設学生卒業式、理療研究生修了式 ———徳竹忠司
- 6 ●附属中学校3年生「ファイナルコース in 筑波」 ———山口泰宏
- 7 ●みんなで描いたイワシの海 ———齋藤 豊
- 7 ●2つの美術展 —卒展と日台聾学校美術交流展— ———玉生美智子
- 8 ●第18回「科学の芽」賞 募集要項



くりはま
レインボー



卒業生を送る会、卒業生と作ろう「くりはまレインボー」 附属久里浜特別支援学校

非連続の時代における学校教育に向けて

附属学校教育局 教育長 吞海沙織



DONKAI
SAORI

昨今、ChatGPTなど生成系AIが社会に大きなインパクトを与えています。例えば、生成系AIを使えば、AIとの対話を通じて、誰でも素早く簡単に文章を生成することができます。しかしその生成された文章の内容が正確であるとは限りませんし、誰かの著作物を無断で流用している可能性もあります。本学は「筑波大学における生成系AIの使用に関する基本方針について」を発表し、生成系AIを積極的に活用することを基本方針としつつ、そのリスクを認識したうえで慎重に取り扱うこととしています。

2023年4月に附属学校教育局教育長を拝命いたしました呑海沙織です。これまでの経験がそのまま通用しない非連続の時代において私たちは、「人」だからこそ発揮できる資質や能力を見定め、育む必要があります。そして、このような時代だからこそ、エクスペリメンタルスクールとしての筑波大学附属学校群の社会的意義は、より高まると考えられます。みなさんと一緒に闊達に対話できる風通しの良い教育局を目指したいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

令和4年度附属学校研究発表会が開催されました

附属学校教育局次長 雷坂浩之

令和5年3月6日（月）から31日（金）にかけて、教育局主催による附属学校研究発表会を開催しました。テーマは、「附属学校群における教育研究活動の共有と発信（その2）」とし、昨年に引き続き、附属学校群各校がそれぞれ取り組んでいる研究・教育活動の内容、教育局の教員と附属学校の現場の先生とが連携して取り組んでいるプロジェクト研究の内容などを紹介させていただきました。

本発表会は、コロナ禍以前は直接対面で開催していたのですが、オンデマンドの形式に切り替えて今回で2回目となりました。オンデマンドによる発表会は、その内容を開催期間内はいつでも・何度でも視聴できることが好評で、おかげで参加者が自宅や職場などどこからでも参加できる利点があり、直接対面で開催していたときよりも参加者数が増加する傾向にあります。



今回も、各附属学校の教員や保護者、本学の研究者や学生などの学内関係者150名、学外の教育関係者などが75名の計225名の方々に発表された各種コンテンツをご観聽いただきました。観聽後のアンケート結果には有意義だったとの感想が多く、学内の参加者には各校の研究の相互理解が深まり、学外の参加者には附属学校や教育局が取り組んでいる研究・教育活動をご理解いただく良い機会となりました。

附属各校の研究及びプロジェクト研究等の詳細は、以下のURLをご参照ください。

「令和4年度研究発表会報告書」

<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/category/training/>

小学部高学年 スポーツ体験授業

附属視覚特別支援学校 教諭 佐藤寛哉



嘉納治五郎像前での講義

本学との連携を含む
オリンピック・パラリン
ピック教育の一環とし
て、普段行うことが難
しいスポーツの体験

や、本格的な競技施設での運動経験を目的に、1月31日に小学部4・5・6年生を対象として、筑波キャンパスでスポーツ体験授業を行いました。

今回の体験授業は「本学におけるスポーツへの取り組みに関する講義」、「ラートの体験」、「陸上競技場での持久走」という3つの内容で構成しました。

筑波キャンパス到着後、嘉納治五郎像の前で体育系特命教授の真田久先生より、嘉納治五郎の功績や本学におけるスポーツの取り組みについてお話をいただきました。

中央体育館では体操部の学生にご協力をいただき、ラート等を体験しました。ラートに触れて大きさや形を確かめた後、一人ずつラートの中に入り側転に挑戦しました。最初は緊張し、おそるおそるといった様子でしたが、回ることができて嬉しそうな児童や、「もっとやりたい」と話す児童もいました。

午後は陸上競技場で、体育系教授の齊藤まゆみ先生やアダプティッド体育・スポーツ学研究室の学生のご協力の下、持久走の計測を行いました。1周400mの本格的な陸上競技場の広さやターンの感触を感じながら走ることができ、児童からは「広いから気持ちがいい」、「良い経験になった」といった感想が聞こえてきました。

初めての体験や普段とは異なる経験ができ、とても充実した1日となり、児童のスポーツへの興味、関心が深まりました。今後も様々なスポーツに取り組める場を継続していくかと思います。



中央体育館でラート体験



陸上競技場で学生と一緒に持久走

探究とデザイン —駒場美術科の実践—

附属駒場中・高等学校 美術科教諭 川人 武

動画によるプレゼン

Barcode Trainとは?



- ①通過する電車のバーコードを、専用アプリで読み取る
- ②回数に応じてクーポンがもらえる



デザインという言葉は、グラフィックや製品における色や形の工夫など、造形的な技能を指す印象がありますが、

現在では発想や構想の能力、問い合わせの態度などを含む総合的なスキルとして、複雑な問題解決の場面で注目されています。本校の生徒たちは、文化祭の広告や装飾、展示や公演等の企画における造形活動でもデザインの能力を発揮していますが、美術の授業では、造形の基礎的な知識や技能について扱うとともに、彼らの幅広い興味や様々な教科・科目の内容と紐づく汎用的な能力としてのデザインスキルを意識しています。

高校の美術では、身の回りの不便なものやことを探し、解決に導くための問い合わせを立て、その問い合わせを手がかりにチームごとにスケッチや模型制作などによってアイデアを広げました。最終的にまとめたアイデアをいくつかのチームが全国高等学校デザイン選手権大会「デザセン2022」にエントリーし、2チームが入選、そのうち1チームは決勝大会に進出しました。決勝進出したチームは、踏切の待ち時間を楽しいものにするアイデアに取り組み、プレゼンテーションと質疑応答で高い評価を得て、最高賞である文部科学大臣賞を受賞しました。本校では、地域研究や課題研究など、自分たちで問い合わせ立て、探究する学びの機会が充実しており、その経験や能力がデザインの学びにおいても活かされています。



オンラインによる決勝参加

表彰式



コミュニティバスの乗車体験とマナー学習



附属大塚特別支援学校 小学部主事
田上幸太

附属大塚特別支援学校では、令和4年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、実践研究に取り組んでいます。

小学部では、その実践研究の一環として、3・4年生が特別支援学校生活科の単元「マナーを守ってB-ぐるバスに乗ろう」の学習に取り組みました。文京区を走るコミュニティバスである「B-ぐるバス」の運行会社の協力を得て、1月26日にはバスと運転手さんに学校に来ていただき、実際のバスを学習の場として、バスの乗降やお金の支払い、車内での過ごし方や「手すりを持つ」、「荷物を膝に乗せて座る」、「静かに過ごす」などのマナーについて学習しました。

普段運行されているバスの中では他の乗客もいるのでじっくりとマナーの学習には取り組めないのですが、今回は実際のバスで乗車の仕方やマナーを学習できたことの意義は大きく、児童はやや興奮気味ながら一生懸命学び、表現しようとしており大変印象的でした。

また、児童から運転手さんに「マナーを守るとどんな気持ちですか?」と質問すると、運転手さんは「皆さんがマナーを守ると運転に集中でき、やさしい気持ちになります。やさしい運転ができます。」と答えてくれました。交通機関の利用だけでなく、そこに関わる仕事をする人との交流を通して学習することで、より学びを深めることができました。



マナーを守って座席に座る



バスの前で運転手さんと一緒に

筑波大学附属小学校 創立150周年



附属小学校 教諭
笠 雷太

令和4年度、筑波大学附属小学校は創立150周年を迎えました。制限の多い中、航空写真デザインや、学校のグッズデザインの募集など楽しいイベントも実施されました。

そして令和5年1月、全校児童、PTA、来賓が講堂に一堂に会しての記念式典を執り行うことができました。卒業生講演として、狂言師の野村萬斎氏にご登壇いただきました。狂言の楽しさが会場いっぱいに広がり、コロナ禍であることを忘れるような時間となりました。講演の後半、約20年前に野村氏がテレビ番組の企画で授業をした際の教え子である、三輪楨氏、紫藤佑介様にもご登壇いただき対談形式でお話を伺いました。附属小での思い出だけでなく、本校での学びが社会に出てどのように生かされているかなど、子どもたちにとって心に留めておいて欲しい大切なお話をいただくことができました。最後には狂言の「笑いの型」を会場全員で演じ、盛り上げてくださいました。

附属小としての長い積み重ねを受け継ぎながら、常に新しい変化を続けている本校ですが、いつの時代においても子どもと教員、保護者が手を取り合って共に学校文化を創りあげていこうとする気持ち、まさに美意識がその底に流れていることを実感した貴重な時間となりました。





Topics //

総合的な探究の時間「筑波スタディ」の取り組み

附属高等学校 教諭
山田研也

附属高校は2013年よりSGH幹事校を5年間務め、その間探究活動プログラム「SGHスタディ」を開発、その後「筑波スタディ」としてその実践を全国に発信してきました。

筑波スタディでは、1年次に「1スタ」として、探究活動の知識やスキル獲得する「共通基礎講座」、教員のガイドのもとで基本的な研究の流れを習得する「予備研究」を行い、2年次に「2スタ」としていよいよ「本研究」を行います。

特徴的な取り組みの1つに「チューター制度」があります。大学院あるいは大学4年生で現在自らが研究活動を行っている本校卒業生に協力を呼びかけ、「チューター」として多くの生徒を指導してもらいました。その他、上級学校や外部機関のサポートも受けながら探究活動の質の向上を図り、その中で各種コンテストで入賞したり、東京大学学校推薦型選抜等で進路を切り拓いたりする生徒も出てくるようになりました。

教員間でも研修を重ねています。外部講師を招いての研究会や、チューターとの合同研修会等を実施しながら、指導力のより一層の向上を目指しています。



教員研修会の様子



筑波スタディ概念図



Topics //

第51回 肢体不自由教育実践研究協議会

附属桐が丘特別支援学校 教諭 田村裕子

令和5年2月3、4日に「社会で生きる力を育む教科指導」をテーマに、第51回研究協議会をオンラインにて開催しました。文部科学省の菅野和彦先生には「肢体不自由児の卒業後を見据えた教育活動の充実」、ノートルダム清心女子大学の青山新吾先生には「日本型インクルーシブ教育の構築に向けて」というテーマでご講演いただきました。また、当校からは別の地域の学校に通う子供との「学び合い」を創る遠隔合同授業の取組や、障害の重い子供が主体的に学びに向かうことができるような指導や教材の工夫を図った単元づくりの取組を発信しました。

全国から約230名の方にご参加いただき、当校にとっても学びを深める機会となりました。



中学部体育の授業「自分で描れてみよう」



小学部国語の授業「一緒に絵本を読もう」



Topics //

SEA-Teacherプロジェクトの受け入れ

附属坂戸高等学校 教諭 建元喜寿

2023年2月7日から約1か月、インドネシア教育大学、コンケン大学（タイ）、セントラルゾン州立大学（フィリピン）から合計9名の教育実習生の受け入れを行いました。東南アジア教育大臣機構(SEAMEO)は、2016年から各国大学間交換教育実習(SEA-teacher)を実施しています。筑波大学は2020年から参画しましたが、COVID-19の影響で中断、3年ぶり2回目の実施となりました。高校生は、英語だけではなく、英語で数学、理科、社会、体育、農業の授業を受けられる貴重な機会となりました。

グローバルマインドをもった教員養成の分野では、日本は他国と比較し遅れをとっています。SEA-teacherプロジェクトへの参画は、日本の教員養成に大きなインパクトを与えることが期待されます。



インドネシア人教育実習生による化学実験の授業



インドネシア人教育実習生による数学の授業

Check!

Check!

令和4年度 理療科教員養成施設 施設学生卒業式、理療研究生修了式

理療科教員養成施設 講師 德竹忠司



施設学生卒業式 卒業証書 特別支援学校自立教科種免許状授与

理療科教員養成施設の教育プログラムには、3つのコースがあります。①施設学生：視覚特別支援学校自立教科教諭一種免許の取得を目指すコース（修業年限は2年間）。②臨床専攻生：東洋医学的物理療法に関する基礎的・臨床的な研究指導を受けるコース（修業年限は1年間）。③理療研修生：はり・きゅうの国家資格取得後の臨床研修コース（研修期間は1年ごとに更新可能）となっています。

昨年度末に12名の施設学生が2年間の就業を終え卒業しました。本学年は、視覚特別支援学校に在籍する生徒の減少を反映したように学生数が少なかったこともあります。入学時からまとまりがあり、クラスが団結して教育実習・卒業研究などを乗り越えて、卒業という晴れの日を迎えるました。

理療研修生は4年間在籍が1名、2年間在籍が5名、1年間在籍が3名修了しました。在籍した年数により、修得した臨床スキルに差がありますが、基本的な思考パターンが修得できていれば、自らの努力で能力の向上は期待できます。新年度からは個人開業・進学など、新たなフィールドでの活動を目指し果立っていきました。



施設学生卒業式 集合写真



修了証書授与
臨床専攻生・理療研修生修了式



附属中学校3年生 「ファイナルコースin筑波」

附属中学校 主幹教諭 山口泰宏

卒業を間近に控えた3月10日(金)、附属中学校の3年生200余名は中学最後の校外行事で筑波を訪問しました。

午前中には市内の研究機関を巡るサイエンスツアーを行いました。生徒はそれぞれの興味に基づいてJAXA訪問、農研機構の「食と農の科学館」の見学、JICAでのワークショップ参加など、5つのコースの中から希望するものを選択してツアーに向かいました。どのコースも予定時間が足りなくなるほど、集中して学んだあつという間の2時間でした。

筑波山神社前でおいしい昼食をいただいた後、ケーブルカーに乗って山頂へ向かいました。短い滞在時間でしたが、男体山から女体山まで走るようにして踏破する姿がたくさん見られました。

この3年生たちは、本来ならば4月に行われるはずだった入学式が6月にずれ込んでしまった生徒です。1年生の7月には房総、富浦の海でみんなで隊列を組んで泳ぐはずでした。2年生の時には黒姫高原で登山やキャンプファイヤーを楽しむはずでした。おしゃべりしながらお弁当を食べ、たわいもない会話で笑い転げるありふれた日常が長い間制限され続けました。

本来ならば…、と大人たちが勝手に残念がる一方で、生徒たちは「そのとき、そのときにできることを、全力でやりきった3年間」に何一つ悔いもないようです。女体山の岩の上に立って「卒業、さみしー！」と大声で叫んで、ニコニコしながら下山する姿が3年間の成長の証がありました。



JICAにて ボードゲームで国際交流



JICAにて 民族衣装で国際交流



ステンシルでイワシを描いています

みんなで描いた イワシの海

附属久里浜特別支援学校 副校長
齋藤 豊

附属久里浜特別支援学校の校舎にはくじらや魚の絵が描かれています。これらは平成27年度「学校わくわくデザインプロジェクト」として、保護者、教員、そして、幼児児童を含めたみんなで描いたものです。令和4年度、その活動を再度立ち上げ、海沿いの道に面した外壁の塗装を行いました。当時、校舎の絵画デザインをしてくださった方から、いくつかの案を頂き、全校アンケートを経て「イワシの海」というデザインに決定しました。作業は2日にわたって行いました。まずは白い壁に下地として、3種類の色味の違う青のペンキを塗りました。そして翌週末、10月29日(土)。子供たちが風船やスタンプ、ステンシルなどを使ってイワシを描いていきました。ペンキまみれになりながらも、子供たちは一つずつ、イワシや水の泡を描いてい



完成したイワシの海



スタンプでイワシを増やしていくよ!

きます。中にはタコを描いた子もいました。味気のない白い壁が、目の前にある海の中を描いたような素晴らしい壁になりました。塗装を行った日は、ちょうど近くでウォーキングのイベントがあり、通りかかった沢山の人たちが「いいね。」とか「頑張ってね。」と声を掛けてくださいました。イワシを描いていた子供たちはちょっと照れ臭そうにしながらも喜んでいました。また、「こんなところに特別支援学校があったんだ。」と知ってくれた人たちも沢山いました。三浦半島にお越しの際には、久里浜野比海岸前にお立ち寄りいただき、是非、久里浜特別支援学校を彩る子供たちの作品を御覧ください。

2つの美術展 —卒展と日台聾学校美術交流展—

附属聴覚特別支援学校 教諭
玉生美智子

2023年1月20日～24日、千葉県市川市にある芳澤ガーデンギャラリーにて2つの美術展を本校専攻科造形芸術科が開催しました。

ひとつは毎年開催している『造形芸術科卒展』です。専攻科修了を控えた生徒たちが、専攻科2年間の学習成果発表の場として準備から会期中の案内や会期後のお礼状まで中心となって行っている、学習の集大成です。

卒展と同時開催されたのが『日台聾学校美術交流展』です。台湾の聾学校2校（臺北市立啓聰學校、台南大学附属啓聰學校）とコロナ禍でも中断することなく美術作品をおおして国際交流を行ってきましたが、その台湾の生徒作品と本校の生徒作品の展覧会です。

卒展に並んだ油絵からグラフィックデザイン・写真などの多彩なジャンルの作品、日台の文化の類似や相違を感じさせる興味深い表現の作品など、合わせて100点以上で天井が高く広い会場を埋め尽くし、一般の方々にも数多くご来場い

ただくことができました。

会期中には専攻科2年生が手話、口話、筆談などの様々なコミュニケーションツールを使い分けながら作品の制作過程や作品に対する思いなどを積極的に説明し、お客様からは作品に対する質問や感想をいただく中で、自らの思いを伝える・伝わることの大切さや喜びを実感して今後の制作への意欲も高まったようです。

同じ会場に並んだ台湾の作品には制作者の視点から、その技法や表現に対して興味をもち海外の文化に対する興味も生まれてくるなど、2つの展覧会をとおして大きな学びを得たと感じています。



来場者への作品説明



日台聾学校美術交流展

第18回 朝永振一郎記念
「科学の芽」賞募集

募集期間 2023年8月21日(月)～9月16日(土)

応募条件 小学校3年生～中学校、義務教育学校、高等學校(高等学校)3年生までの生徒、中等教育学校、特別支援學校の後期もしくは同様の課程の生徒。

提出書類 レポート用紙(A4判 片面)10枚以内

審査方法 筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び後援団体関係者などが審査・表彰

受賞発表会 2023年11月頃、筑波大学ホームページに掲載

賞状発送 賞状は受賞者の所属校長より賞状と記念品を贈呈

連絡先 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 筑波大学「科学の芽」賞実行委員会

お問い合わせ 筑波大学「科学の芽」賞実行委員会(学友会課)
03-3942-6806
E-mail: kagakunome@un.tsukuba.ac.jp
詳しくは、筑波大学ホームページ「科学の芽」賞を参照
<https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/>

151 筑波151年
筑波大学151周年記念事業
2023年春号

151 お問い合わせ 筑波大学「科学の芽」賞実行委員会(学友会課)
03-3942-6806
E-mail: kagakunome@un.tsukuba.ac.jp
詳しくは、筑波大学ホームページ「科学の芽」賞を参照
<https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/>

ポローニア
paulownia

vol.57

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ貴賀な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事來歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

発行日………令和5(2023)年5月31日
発行者………附属学校教育局教育長 吞海沙織
発行所………筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800
デザイン………スピーチ・バルーン
印 刷………広研印刷 使用紙: U-limax [日本製紙]

